共に悲しみ “復興”に寄り添い続ける



経済学部教授
伊達 浩憲
(2015年度センター長)

私たちが、東北の被災者のためにできること。それは、東日本大地震のことを深く学び、亡くなられた方々、ご遺族の気持ちを想い、共に悲しむことではないでしょうか。

2011年3月11日に発生した東日本大震災では、多くのいのちが喪われました。「死者」は15,893人、「行方不明者」は2,572人、「震災関連死の死者」は3,331人です。

「死者」に分類された方の中には、ご遺体が見つからないにもかかわらず、ご遺族が泣く泣く「死亡届」を提出し、葬儀が行われたケースもたくさんあります。

親を喪った子供たち、「震災孤児」は241人、「震災遺児」は1,531人にのぼります。

被災地では、家族・親せき・友人が亡くなっていない人はいない、被災者はみな遺族である、誰もが愛する人を喪い、悲しみや苦しみを抱えながら生きている。そう言っても過言ではないと思います。

突然の別れに、茫然自失し、生きる意味を見いだせない人も大勢います。「亡くなった妻のことを夢で見る」、「夢でいいから娘に会いたい」。このようなお話を被災地でたくさん聴きました。

「生きていること自体、有難いことだ」と言われますが、自責の念、罪悪感、後悔の念を抱いている被災者もたくさんいます。

「3月11日の夜、暗くて寒い避難所で、海のほうから『助けてくれ』という叫び声が聞こえたが、何もできなかった。申し訳ない」。

「妻と一緒に津波から逃げる時、妻の手を放してしまった。なぜ、あの時、手を放してしまったのか。自分のほうが流されればよかったのに。なぜ私が生き残って、妻が死んでしまったのか」。

「あの日の朝、お母さんとケンカしちゃったから、お母さんは津波に流されちゃったんだ。ケンカなんかしなければよかった」(この子を見守る心理カウンセラーの言葉)。

また、1995年1月17日の阪神・淡路大震災から20年の歳月が経ちましたが、神戸でも、いまだ、答えようのない問いかけをし続けている方がたくさんいます。

「地震の直後、おばあちゃんが、とっさに私に覆いかぶさってくれた。そこに天井が落ちてきて、おばあちゃんは亡くなった。私のせいで…」。

かける言葉もありません。私はただ黙って涙を流すしかありませんでした。

私事ですが、震災の年に父を看取りました。家族や大学の同僚たちが私を精神的に支えてくださったおかげで、父の死を受けとめられるようになりました。

大規模災害にみまわれた被災地ではどうでしょうか。周りの多くの方々が、同じ様に、つらい体験をされています。仮設住宅などで避難生活を強いられている人、故郷から遠く離れて避難している人は、いまだ194,793人もいますが、みな自分の生活再建のことだけでも精一杯な状況にあります。大規模災害がもたらす大勢の方々の突然の死。それは、受けとめることがとても難しい問題を私たちに投げかけていると思います。

震災後、龍谷大学は、宮城県石巻市を中心に、15回のボランティア活動を行ってきました。児童74人と教職員10人が死亡・行方不明となった石巻市立大川小学校で、そして、入院患者40人と職員24人が死亡・行方不明となった石巻市雄勝病院で、「喪われたいのちの意味」につ

いて被災者の方々から学んできました。

“復興”という言葉に違和感を抱き、「あの子はもうかえって来ない」と考えている被災者もたくさんいらっしゃいます。

被災者一人ひとりの気持ちを大切にし、共に悲しむことで、被災者一人ひとりとつながり続けたい、そして、龍谷大学ボランティア・NPO活動センターとして、一人ひとりのいのちを大切にする実践活動を行っていきたいと思います。

とても難しい課題ですが、被災地でうかがった「喪われたいのちの意味」について思いをはせる時、それは私たちの義務なのではないか、と考えています。

今後とも一層のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

「悲しさは共に悲しむ者がある時、ぬくもりを覚える。悲しむことは温めることである。悲しみを慰めるものはまた悲しみの情ではなかったか。悲しみは慈みでありまた『愛しみ』である。」(柳 宗悦『南無阿弥陀仏』)。